

H・C・ウォリノチ

『輸出経済の貨幣的諸問題、一九一四—一九四七年におけるキューバの経験』一九五〇年

Henry Christopher Wallich, *Monetary Problems of an Export Economy, The Cuban Experience, 1914—1947*, 1950, xv, 357 pp.

逸見謙三

ウォリノチほどの權威によつてキューバ経済の貨幣的側面が縦横に分析されたことは、我々の経済知識を豊富ならしめる上で、非常に大きな寄与である。未開発国経済とか国際金融とかに興味をもつている者にはもちろんのこと、砂糖問題とか第一次生産物とかに関心をもつている者にとつても本書は魅力的分野を扱つてゐる。対象とされたキューバは輸出経済 export economy としては典型的なものである。なるほどその一人当り所得は熱帯諸国の中で最も高いと考えられているものの、その輸出品たる砂糖は典型的の第一次生産物の価格変動をはなはだしく受けるもので、従つて「その能率の砂糖経済は世界市場の変動に対して著しく脆弱」であり、「経済の特殊化が過度になされている」のである。

さらに、もう二つの条件がある。その一つは、多くの未開発諸国に共通のものが、やはりキューバに典型的にみられるところであるが、豊富なる土地資源に外国資本（この場合合衆国資本）を導入して経済開発を行つてゐるという事実である。この場合、通貨政策は単に国内経済の安定のみならず、外国資本に対する顧慮も払わなければならない。その二は在来通貨ペソとドルとの關係である。キューバにおける大企業の間ではドルが流通して、ペソに対してはそれほどの信頼がない。しかし民衆の間、例えば小売等においては民衆の所得水準を反映してペソの百分の一たるセントアブオ centavo が流通している。ドルとペソは両方とも法定通貨であり、一定の率で完全なる交換性をもつてゐる。かくして著者、テーマ、対象たるキューバの諸条件の何れもが興味をそそるものであるといふ。読後の印象では、本書はそれに相応した内容をそなえている。

輸出経済とは、普通に従属経済 dependent economy といわれている経済であつて、投資経済 investment economy とか基本国 key country とかに対立する概念である。後者では経済変動の戦略的諸要因が自国内にあり、従つて国内の産業活動を統制することに於て国内経済を安定に保つことができる。また外国貿易は国内景気を相殺するように作用する。好景気では対外バランスは赤字となり、不景気では黒字となる。このような経済では国

内の通貨政策はやりやすいといえよう。輸出経済の経済変動は全く海外市況に左右される。外国需要は統制できない。しかし重要なことはこのような経済では好景気に対外バランスが黒字で、不景気に赤字になるという事実である。すなわち、貨幣的景気政策を非常に困難ならしめる事実の存在である。更に実業家、殊に外国の実業家の利害も考慮しなければならない。これなくしてはキューベの経済は発展しないのである。ナショナルリストイックな見地によつて、自国の経済を自国の手によつて統制しようという試みは全てこの *foreigners' business interests* やキューベの現実がもつ経済のロジックと衝突する。ペソの統制、為替の統制、中央銀行等然り。本書はこれらの諸問題をウィザインドに分析している。

内容は四部よりなる。第一部はキューベ経済の簡潔な描写を三〇頁でなしている。貨幣の問題に全く興味をもたない者にとつても、この部分はキューベ経済の一般的性格の記述として興味があるであろう。第二および第三部の一六〇頁はキューベ通貨史ともいわれるべきものである。第二部ではキューベの政府によつてペソがキューベ通貨として国内に流通せしめられた一九一四年から一九三一年までを含む。この期間はドルがペソを駆逐していき、キューベがドル通貨地域となつていつた期間である。第三部は一九三二年から一九四七年までを含む。この期間は徐々にキューベが

独立の通貨地域となつていつた期間である。一九四八年二月には遂に中央銀行法が通過したのである。第四部の一二〇頁ではキューベ経済は縦横に分析される。キューベ経済の戦略的諸力、通貨切下、為替統制、および中央銀行のあり方につき論ずる。近代経済学的分析を先述の諸条件をそなえたモノカルチャー的輸出経済に応用している。この部分はキューベとか、砂糖とか、また未開発国とかに特に興味をもつていない者にも面白いであろう。

断片的興味は各所に見られる。砂糖心理 *sugar mentality* (一一頁)、後進国における独占の性格 (二二頁)、グレシヤムの法則 (九九頁以下)、後進国には貨幣数量説があらはまる (二〇七頁)、ホット・マネーは重要でない (二五八頁) 等々。しかし、これらを除外しても、貨幣を特に専門とせず、またキューベに関する知識に乏しい私にも本書全体が面白かつた。読み終つた後において貨幣分析こそ経済分析の中心であり、また貨幣分析は一般経済分析のまさにわく内のものであつて、特殊分野のものではないことを改めて痛感した。